

卷頭言

〈特集号〉
日本近代国家の基底と外縁

Study on Ethic and Attempts for Making of Modern Japan.

2019年度末以来の新型コロナウイルス流行の余波を受け、史料収集をはじめとした研究活動が大幅に制約されたこともあり今年度は特集号の刊行が危ぶまれたが、会員諸氏の熱意と地道な努力に支えられて、何とか刊行にこぎつけることができた。記して幾重にも感謝したい。まず最初に言いわけになるが、研究代表者も「『大東亜戦争』関与の精神史」という表題で寄稿する予定で準備を進めていたが、目を通さなければならない史料が膨大なのと、図書館のマイクロフィルムが長期間使用禁止であったため、期日までに原稿を仕上げるができなかった。それを恥じるとともに、何らかの形で責をふたぎたいと考えている。

こうした研究代表者の不甲斐なさをよそに、当研究会の中堅・若手研究者諸氏からは以下の成果を寄稿していただいた。

- ・伊故海貴則「明治維新时期地域社会における多数決導入—静岡県駿河国地域の地租改正をめぐる合議を中心に—」。
- ・穎原善徳「明治期日本における条約の国内編入をめぐる問題」。
- ・斉藤仁志「排日移民法と熊本」。
- ・島田龍「詩人の罪と罰—伊藤整と女たち、『鏡の中』『幽鬼の街』（1937）論」。
- ・城下賢一「1960年薬事法改正と行政・団体関係—自民党政権初期の政治過程の事例分析—」。

- ・海野大地「〈史料翻刻〉西潟為蔵日記」(大正2年1月～6月)。

伊故海貴則氏の論稿は、氏が修士論文以来取り組んでいるテーマの一環をなすものであり、今日われわらが民主主義を構成する通例の手続きとして了解している多数決の機能と意味を批判的に再検証しようとする力作である。個別実証主義が大勢を占める傾向のなかにあって、こうした論争的な視座を生かした博士論文の完成は関連分野にとって大きな刺激となる。その完成が待たれるところである。

額原善徳氏の論稿も、氏が長期にわたって取り組んでいる憲法史研究の一環をなす成果である。大日本帝国憲法から日本国憲法を通して、憲法や条約の文面の常識的解釈だけでは捉えきれない運用理念を検証しようとする氏の姿勢は野心的でありながら誠実である。今後のさらなる研究の深化を期待したい。

齋藤仁志氏の論稿は、現時点で可能なかぎりの熊本海外協会の関係資料を渉猟し、その活動実態を実証的に明らかにした貴重な成果であり、今後同分野の基礎的研究として意味をもつであろう。同地に在住し教職に携わり多忙を極めながらも精力的に研究をすすめている氏の博士論文の完成が待たれる。

島田龍氏の論稿は、独自の関心と視座が持ち味の個性豊かな成果である。学会の趨勢に振り回されることなく、徹底した史料収集と解説を踏まえた上で、あくまで自らの感性を生かし、問題意識を貫こうとする成果は今日にあってこそ貴重である。これまでの氏の一連の成果と合わせて、左川ちか研究の新境を開くものとして注目されよう。

城下賢一氏の論稿は、初期の自民党政権下における政治過程の実体を再現した成果として意味をなす。この時期以降の政策対立と政治過程の交錯のあり様を意味づける作業と重ね合わせ、より大きな視座のもとに再構成するための基礎的作業として重要である。

最後に、「史料紹介」として掲載した「西潟為蔵日記」の翻刻は、海野大地氏が城下賢一、田中将太、木多悠介、落合優翼、中村凌太郎ら各氏の協力を得て、成し遂げた成果である。同時期の地域政治と中央政治を連結する地方政治家の活動実態が窺えるものとして貴重であり、今後同分野に関心をもつ研究者に有益な材料を提供することになろう。修士論文以来この史料に馴染んできた海野氏の「解題」も秀逸である。今後の作業の継続を期待するとともに、こうした成果を生かした同氏の博士論文の完成を期待したい。

以上の成果は、部分的には今後さらに論証を深めるべき箇所や課題を残しているかもしれないが、いずれも新境を開削しようとする生気に満ちている。

もはや老境にはいった研究代表者にとって以上のような中堅・若手研究者のエネルギーに満ちた研究に間近で接することは、自身の研究を継続していく上でかけがえのない滋養となるが、さらに老耗化が進めば、その熱量を受けとめることすら困難となる。彼らの研究を支援できるこの上ない喜びを感じながら、それに身を焼き焦がされることのないよう、以前にも増した精進への覚悟をあらたにした。

その覚悟とともに、本特集号を世に送る。読者諸賢の批判を期待したい。

2020年12月

近代日本思想史研究会

代表 小関 素明

